

ふぞろいな世界線を 振り切って

紫音みけ Shion Mike



アルファボリス文庫

目次

プロローグ	不可思議な現象	5
第一章	世界の分岐	7
第二章	タイムリープの可能性	59
第三章	最善の未来	125
第四章	観測者	177
エピローグ	私たちの夏	270

プロローグ 不可思議な現象

セミの声がこだまする、高校一年の七月。

その奇妙な現象は、なんの前触れもなく、私たちの日常に突然入り込んできた。

「あれ。――いちのせノ瀬？」

始業前の教室に足を踏み入れると、そんな声が私を呼びとめた。

見ると、すぐ近くの席に腰掛けた男子が不思議そうな顔をこちらに向けている。

クラスメイトの遠野とおの彼方かなたくんだ。背が高く、喧嘩が強いという噂がある人。周りの男子たちからは恐れられているため、普段から一人で過すごしていることが多い一匹狼。

そんな彼が、こんな風に私に声をかけてくるなんて珍しい。

けれど何より私が驚いたのは、もっと別のことだった。

「え……遠野くん、どうしてここにいるの？」

思わず、そう聞き返してしまった。

聞かずにはいられなかった。

だって遠野くんは昨日、交通事故に遭って亡くなったのだ。

彼が今、ここにいるはずはない。

まさか幽霊、それとも幻？ と最初は疑ったけれど、周りのみんなにも遠野くんの姿は見えていられない。

そして当の彼は私に対して、さらに思いもよらぬことを口にした。

「一ノ瀬こそ、なんでここにいるんだよ。昨日、事故で亡くなったって聞いたけど……」

彼の中ではなぜか、私の方が死んだことになっていた。

私と彼との間で、認識の食い違いが起きている。

何か、説明のつかない現象が起きている。

不可思議で、きつと忘れることのできない、私たちの夏が幕を開けた。

第一章 世界の分岐

運命の事故が起こるその日、私は海を見ていた。

神戸の南側。瀬戸内海に面した港のそばには、複数の商業施設が集まる観光エリアがある。

海に臨む形で、大観覧車や子ども向けテーマパーク、ショッピングモールなどが建っている。その目と鼻の先には、神戸のシンボルであるポートタワーがそびえる。夕焼け色に染まっていくその景色を眺めながら、私は一人で潮風に当たっていた。クルーズ船が入りする波止場を見下ろす形で、ウッドデッキのオープンテラスが広がっている。その端にある段差に腰掛けてぼーっとするのが、私は好きだった。

昼の暑さも少しづつ和らいで、過ごしやすい時間帯がやってくる。

けっして静かな場所ではない。さすがは観光スポットというだけあって、この時間になると平日でも人が集まってくる。特にカッブルが多いのは、きつとここが夜景を眺めるのに適しているからだろう。

この雑踏が、なんとなく心地よかった。

静かすぎず、うるさすぎず。適度な雑音は脳の集中力を高める、なんて話も聞けれど、それに通ずる何かがあるのかもしれない。

だから、心が疲れた時はいつもここに来る。

とりわけ今日は、大事な友達と喧嘩をしたばかりだった。

喧嘩とは言っても、特に言い合いなんかをしたわけじゃない。ただ一方的に、私が避けられているだけだ。

高校のクラスメイトである、天江あまえハルカちゃん。

彼女とは今年の春、入学式の日に出会った。出席番号順で並んだ時にお互いが前後だったことから仲良くなり、あの日から夏休みを目前に控えた今日まで、私たち二人は教室でいつも一緒にいた。

それが、今日の昼休みから急に、彼女の態度が豹変ひょうへんしたのだ。

四時間目の授業が終わって、いつものように二人でお弁当を食べようとすると、彼女は私を無視して別のグループに交ざってしまった。まるで私のことが見えていないかのように、こちらと視線を合わせることは一切なかった。

彼女は気さくで明るくて、誰とでも仲良くなれる。だから私以外にも仲の良い友達はたくさんいる。私一人を切り捨てたところで、きつと困ることは何もないだろう。

私は何か、彼女の気に障るさわようなことをしてしまったのだろうか。

もしそうなら謝りたいのだけれど、何が原因だったのかはわからないし、あの状態の彼女にどう話しかければいいのかもわからない。

口下手で勘も悪い私には、どうすれば彼女と仲直りができるのが想像できなかった。

そもそも、地味で存在感の薄い私と、人気者の彼女とでは、最初から釣り合っていないかったのかもしれない。そう考えると、ここから関係性を修復するのは不可能にも思えてくる。

私はもう一度彼女と仲良くなりたいけれど……もう無理かもしれないと思うと、どうすればいいのかわからなくて、なんの行動も起こせなくなってしまう。

だから、こんな時はいつも、私は手元のスマホに向かって問いかけてみる。

「ねえ、ラビ。私、どうしたらいいのかな」

画面の向こうからこちらを見つめているのは、ウサギっぽい見た目をした動物の

キャラクターだった。

白くて丸い体に、細長い耳が生えている。シンブルで可愛らしい顔をしたそのキャラクターは、スマホのマイクを通して私の声を聞き取り、質問に答えてくれる。

「やつほー、真央^{まお}。どうしたの？ 何か困ってるみたいだね。もつと具体的な情報を教えてくれたら、ボクも相談に乗るよ！」

幼い少年のような声。およそ機械音声とは思えないような流暢な日本語で、彼はそう提案してくれる。

スマホ専用のA Iアシスタントアプリ『ラビ』。

これはA Iが搭載されたキャラクターと会話することができるとあるアプリで、仕事や人間関係の悩みなど、あらゆる面で精神的なサポートをしてくれる。

私が困っている時、相談に乗ってくれるのはいつもこのラビだった。彼は私以外の人間とは話すこともないから、私も彼の前でだけは安心して悩みを打ち明けることができる。

もちろん、毎回必ずしも満足できるような答えが返ってくるわけじゃない。まだまだ人間の心の機微^{きび}に疎い^{うと}彼は、時にはひどく無機質な回答をすることもある。

それでも私にとっては、こうして気兼ねなくなんでも相談できることがとても心強かった。

「あのね。今日は、ハルカちゃんと喧嘩^{けんわ}しちゃって……喧嘩^{けんわ}っていうか、一方的に私が避けられてるだけなんだけど」

A I相手ですえ口下手な私。

けれどラビは、そんな私を嘲笑^{あざわら}ったりはしない。ただじっと耳を澄ませて、こちらの話を真剣に聞いてくれる。だから私も、ついそれに甘えて、じっくり時間をかけながら次の言葉を探していく。

そうやって会話に集中しているうちに、今度は背後から別の人の声が届いた。

「ねえ、君。今一人？」

男の人の声だった。

もしかして私に話しかけてる？ と思って、恐る恐る振り返ってみる。

するとそこには、大学生くらいの知らないお兄さんが立っていた。髪の色が明るくて、ちょっとチャラそうな雰囲気がある。

「えっと、私……ですか？」

こちらが聞き返すと、彼は上機嫌な笑みを浮かべたまま頷く。

「今学校の帰り？ もし時間あるならさ、一緒にご飯とか行かない？」

「え……」

まさかのナンパだった。

こういうのには慣れていない。断らなきゃ、と思うのに、変に緊張してしまって言葉が出てこない。

「えっと、その、私……」

「あー大丈夫、大丈夫！ 俺、奢るし。お金のこととかは気にしないでいいから」

「あ、いや、その」

そうじゃなくて、と口にすることもできないまま、彼の腕が私の肩に回される。

「ほら行こ。美味しいお店知ってるからさ」

ぐいっと無理やり後ろから押されて、体が勝手に前へと進んでしまう。男の人の力強さと強引さに、確かな恐怖心が芽生える。

どうしよう。どうしよう。

こういう時、なんと言って断れば相手も諦めてくれるのだろうか？

きつとこの人は、私が大人しい性格をしていることを見抜いて声をかけてきたのだ。私ならきつと断れないから。気の弱そうな相手を選んでナンパをしたのだと思う。

昔からそうだった。私は内気で、頼りなくて、何もできない子、というイメージを周りから持たれている。そんな私が何かを言ったところで、人の心を動かすことなんてできなかった。

これがお兄ちゃんなら……私と違って優秀なお兄ちゃんなら、いつどんな発言をしたって、周りの人は耳を傾けてくれるのに。

目の前の男の人は、私の気持ちなんて微塵みじんも興味がないようで、足を止めることなく私をどこかへ連れていく。

——嫌だ。

胸の奥では嫌だと叫んでいるのに、私の口はうまく動いてくれない。

素直な言葉が出てこない。

まるで呪いでもかかっているかのように、声は喉元で引っかかってしまう。

——助けて！

声にならない叫びを胸の奥で響かせた、その時。

私の肩に回されていた手を、別の誰かが強引に引き剥がした。

「わっ！……っと、なんだ？」

男の人はびっくりした様子で、自分の手首を掴んでいる相手の顔を見た。

もちろん私も驚いて、その場に急に現れた人物に目を向ける。

そこにいたのは、見覚えのある男の子だった。私と同じ高校の制服に、短い黒髪。背は高めで、白いワイシャツの袖から伸びる腕には引き締まった筋肉がついている。

「やめろよ。彼女、嫌がつてるだろ」

冷静な声でそう言った彼は、私のクラスメイトである遠野彼方くんだった。彼は相手の手首を掴んだまま、キッと鋭い視線を浴びせる。

「な、なんだよあんた。急に出てきて。手、放せて」

ナンパの人はすぐさま遠野くんの手を振り払おうとしたけれど、思いのほか、その手はびくともしないようだった。遠野くんのあまりの怪力に、彼は「えっ」と戸惑いの声を漏らすと、みるみるうちに困惑した表情を浮かべる。

動揺しているのは、私も同じだった。

なぜ、遠野くんがここにいるのだろうか？

彼も学校の帰りにここへ寄った、というのは何も珍しいことじゃないけれど、まさかこんな場面に居合わせるなんて。

「ちよ……なんなんだよ本当に。もしかして、あんたもこの子狙ってんの？ わかったわかった。俺は別の子に行くからさ、それでいいだろ!」

ナンパの人は見るからに焦った様子でそう訴える。

そういうえば、遠野くんの家は空手道場だって話を聞いたことがある。遠野くん自身も空手をやっていて、喧嘩が強くて怖い人……という噂を耳にすることもある。

教室でいつも一人である彼は、周りの男子たちから怖がられている印象が強い。もしかしたら本当に喧嘩が強くて、気性が荒い人なのかもしれない。

もしも今、このまま殴り合いにでもなってしまうたらどうしよう——と内心ハラハラしていると、彼はまったく予想していなかったことを口にした。

「彼女に謝れよ。そしたらこの手を放してやる」

私が呆気（あきけ）に取られていると、ナンパの人は心底面倒くさそうな顔でこちらを見て言った。

「え、そんなに嫌だった？ ごめんごめん、気づかなくて。ほら、これでいいだろ。」

もういい加減にしてくれって」

そこでようやく、ナンパの人は遠野くんの手を振り解いた。そのまま私を一瞥（いちべつ）するなり、ふんと鼻を鳴らして不機嫌（ふきげん）そうにその場を去っていく。

「……あ、あの、遠野くん。ありがとう」

私がぎこちなくお礼を言くと、彼は表情一つ変えることなく、こちらを見下ろして言った。

「なんでもっとハッキリ拒否しなかったんだ？」

「え？」

「嫌なら断ればいいだろ。こっちが大人しくしてたら、ああいう奴はどんどんつけあがるぞ」

彼の言う通りだった。私がなんの抵抗もしなかったから、あの男の人は都合が良いとばかりに強引に事を進めようとしたのだ。

でも――

「その……どう言えいいのかわからなくて」

私が何を言ったところで、あの人は引かなかったかもしれない。弱々しい声で反論

をしたところで、ああいう人はこちらの言葉をねじ伏せてしまう気がする。

「そのまま言えればいいだろ。嫌だって」

「そ、そうかもしれないけど」

遠野くんのように迫力がある人や、お兄ちゃんのようなしつかりした人の話なら、きっと誰もが耳を傾けてくれるだろう。

けれど私は、人と会話するのが下手で、うまく伝えられないから。

親からはよく話し方のことで注意されるし、気の短い人にはあからさまに苛々（いらいら）されたり、話を途中で遮（さへ）られたりすることもある。

今だってそうだ。遠野くんに対して、どう説明すれば納得してもらえるのかわからず、言葉が出てこない。

彼もきっと苛立っている。せっかく助けてくれたのに、これでは恩（おん）を仇（あだ）で返してしまっている気がする。

ああ、私はまたこんな体たらくだ。

いつもいつも、要領が悪くて、人を落胆させてばかりで。

情けなくて、どんどん惨め（みじ）な気持ちになって、つい泣きそうになってしまふ。

そのまま顔を上げることもできずに黙ってしまった私を見て、遠野くんは一つ大きな溜め息を吐くと、どこか改まったように声のトーンを下げて言った。

「別に責めてるわけじゃないぞ。俺も言い方が悪かった。要するにさ、自分の気持ちはハッキリ伝えた方がいいぞって、そう言いたかったんだ」

そんな彼の言葉は、彼のイメージに反して、繊細な優しさが滲^{にじ}んでいた。

意外に思っ、私は再び顔を上げる。

すると、お互いの視線がまっすぐにぶつかって、彼の真剣な瞳から目が離せなくなる。

「一ノ瀬はさ」

と、彼が私の苗字を口にしたので、私はちょっとだけびっくりした。

正直、名前は覚えられてないと思っていた。同じクラスとはいえ、今までお互いに話したことは一度もなかったし、何より、彼はクラスメイトの誰にも興味を持っていないように見えたから。

「一ノ瀬は、いつもブレーキかけてるよな。学校でも、何か言いたそうな時も我慢してるっていうか」

図星だった。と同時に、そんなところまで見抜かれていたことに驚く。

他の人からすれば、私はただ何も考えずにボーッとしている人間に見えるはずなのに。「頭の中では、色々考えてるんだろ？でも結局は何も言わない。そういうの見てるとき、じれったくなるんだよ。俺はなんでもすぐ言うタイプだし。俺からすれば、なんで素直に言いたいこと言わないんだって、もっとハッキリ気持ちを伝えればいいだろうって、もどかしくなるんだ」

彼からそんな風に思われていたなんて、今まで考えもしなかった。

そもそも私のことなんて眼中にないと思っていた。私は影が薄いタイプだし、その場に居ても居なくても変わらないような人間だから。

けれど思い返してみれば、遠野くんは周りをよく見ている節が確かにあった。

以前、体育の授業中にクラスメイトが熱中症になりかけていた時、その兆候^{きざうこう}に一番に気づいたのは彼だった。

それに別の日には、先生が探し物をしていた時、先生の性格からおおよその場所の見当をつけて見つけ出したのも彼だった。

普段は誰ともつるもうとせず、どことなく近寄りたがたい雰囲気を持った一匹狼なのに。その観察眼は優れていて、私みたいな目立たない人間のこともなんでもお見通し

だったりする。

なんだか不思議な人。

掘れば掘るほど新しい顔が見えてきそうな気がして、彼のことをもっと知りたいと思ってしまう。

「遠野くんって……」

面白いね、と言いかけて、ハッと口を噤む。

いけない。一体何を言い出そうとしてるんだろう、私は。軽率にそんなことを言つて、彼の機嫌を損ねたりでもしたら。

「俺が、なんだって？」

「あ、ううん。なんでもないの」

「は？ なんでもないわけないだろ。何か言いかけてただろ、今」

「本当になんでもなくて」

慌ててはぐらかそうとする私を、彼は探るような目で見つめてくる。

「また何か我慢しようとしてるだろ。そういうのやめた方がいいぞって、今話したばっかだよな？ なんですごくそうやって、自分の気持ちを隠そうとするんだよ」

自分の気持ちを隠したい、わけじゃない。

ただ、私はお兄ちゃんと違って要領が悪くて、説明も下手だから。不用意に口を開けば相手を苛々させてしまうから、できるだけ黙っていた方がいいのだ。

今までもずっと、そうやって生きてきた。そうするべきだと思っていた。

なのに遠野くんは――

「口に出さなきゃわかんないだろ。自分が本当はどうしたいのか、ちゃんと言え。言葉を考えるのに時間がかかるなら、いくらでも待つてやるから」

そんな予想もしていなかった彼の言葉に、私の心臓が跳ねる。

いくらでも待つてやる、なんて。そんな風に言われたのは初めてだった。

だってほとんどの人は、無駄なことに時間なんて割きたくないはずだ。口下手な私の話に付き合う時間は、無駄の方が多くは。だから私はできるだけ、普段は聞き役に徹しているのに。

「別に焦らなくていいし、文法がめちゃくちゃでもいいからさ。今、一ノ瀬が思っていること、全部吐き出してみろよ」

話し方が下手でも気にしなくていいと、彼は言ってくれている。

本当に、いいのだろうか。私の話がどれだけ拙くても、つまらなくても、彼は最後まで私の言葉を聞いてくれるのだろうか。

「その、私……」

おずおずと私が口を開くと、彼は相変わらず真剣な顔で、こちらの声に耳を澄ませる。

だから私は、思いきって、少しずつ心の内を言葉にしてみた。

「わ、私……人と会話するのが苦手で、自分の気持ちをどう話せばいいのかわからなくて」

「おう」

「む、無理に話そうとすると、相手に迷惑をかけている気がして、怖くなっちゃって……」

自分の話をするのが怖かった。

口下手な私が長々と話すことで、相手を不快にさせるかもしれない。退屈な思いをさせるかもしれない。実際に、過去にはあからさまに嫌な顔をされたこともあった。だから、不思議だった。

遠野くんはなぜ、こんな私の話を真剣に聞いてくれるのかと。

「遠野くんは、どうして……そんなに優しくしてくれるの？」

私が改めてそう尋ねた頃には、空には一番星が浮かんでいた。

潮の香りを含んだ風が、遠野くんの短い髪を揺らす。

「別に優しくしてるつもりなんてないけど……ただ、一ノ瀬みたいな奴を見ると、放っておけなくなるんだよ。せっかく色々考えてるくせに、全部自分の中だけで完結させようとする奴。俺の弟も、そんな感じだったから」

弟さん。

そうか、遠野くんはお兄ちゃんなんだ。だからこんなにしっかりとって、周りが見えるのかもしれない。

「ねえ、真央。そろそろ家に帰らなくても大丈夫？」

と、今度は私の手元から幼い声が上がった。

ずっと握りしめていたスマホ。その画面の向こうから、ラビが私を心配している。そういえばアプリを開きっぱなしだった。

「十九時三十八分の電車に乗らないと、門限に間に合わないよ」

言われて、私はすかさず時刻を確認する。あと十五分ぐらいしかない。急いで駅まで戻らないと電車に乗り遅れてしまう。

「門限か。そりゃ大変だ。気をつけて帰れよ」

遠野くんはそう言って、わずかに頬を緩めた。

高校生にもなって門限で焦るなんて、と笑われたのかもしれない。遠野くんみたいにしっかりしている人なら、門限なんかなくても親に心配されたりしないんだろうなと思う。

けれど、彼の私を見る目はどこか優しさが含まれているような気がした。もしかしたら弟さんのことも、いつもこんな風に見守っているのかもしれない。

どちらにせよ、彼の穏やかな表情を初めて見る事ができて、私は嬉しかった。

できればもう少しだけ話したかったな、なんて。今までの私では考えられなかったような気持ちが胸の奥から湧き上がってくる。

彼と二人で過ごした時間。こんなにもたくさん自分のことを話せたのは久しぶりだろうか。

普段は表に出せない心の内を知ってもらえて、すごく特別な時間だった。叶うなら

明日の学校でもまた、彼と話せたらいいなと思ってしまう。

「じゃあな、一ノ瀬」

「うん。ありがとう、遠野くん」

まるで夢のような、夏の夜の夜。

お互いに手を振り合って、私たちは別れた。



港の観光エリアのすぐそばにある神戸駅まで走ると、目当ての電車の時間にはなんとか間に合った。

高架にあるホームまで辿り着いたところで、やっと息を整える。

電車が来るまであと一分。無事に門限までには家に帰れそうで、ほっと胸を撫で下ろす。

と同時に、先ほどの遠野くんとの会話を改めて振り返った。

『一ノ瀬は、いつもブレーキかけてるよな。学校でも、何か言いたそうな時も我慢し

てるっていうか」

教室でも、彼は私のことを見てくれたんだ。

そう思うと、なんだか胸の奥が温かくなる。こんな私でも、ちゃんと感情があって、一人の人間なんだって認めてもらえた気がする。

たとえ口下手でも、誰かに伝えたい思いがある。私の話を聞いてほしいって、本当は思っている。

明日、あの教室で遠野くんに話しかけたら、彼はまた、私の言葉に耳を傾けてくれるのかな……なんて、そんな都合のいいことばかり考えているうちに、目の前のホームに電車が入ってきた。

扉が開いて、私はそこへ足を踏み入れる。

どこに座ろうかと迷っていると、車両の外からは救急車のサイレンが聞こえてきた。なんとなく不安を煽る高い音が、辺りに響く。どうやらかなり近い場所を通っているらしい。さらには複数のバトカーの音も近づいてきた。

なんだか物々しい雰囲気だった。もしかしたら、近くで大きな事故でもあったのかもしれない。

やがて出入口の扉が閉まって、私を乗せた電車は北東へ向かって動き出した。



「やっと帰ってきたのね、真央」

帰宅してリビングのドアを開けると、明らかに苛立った様子のお母さんと目が合った。

「あ、お母さん。ただい……」

「今何時だと思ってるの。遅くなるなら先に連絡してって、いつも言ってるじゃない」
まるでこちらが門限を破ったかのような剣幕。げんまく

念のためにスマホで時間を確認してみると、午後七時五十八分だった。

「まだ八時にはなっていないけど……」

門限まではまだ二分ある。そう反論しようとした私の声を遮って、お母さんは疲れたように溜め息を吐く。

「こんなに暗くなるまで遊んでたら危ないでしょ。女の子なんだから。何かあったん

じゃないかって、心配になるでしょ」

どうやら門限は関係なく、私が夜まで外出していたことを咎^{とが}めているらしい。確かにここまでギリギリになることは滅多にないから、本当に不安にさせちゃったのかもでも、八時って遅いのかな。お兄ちゃんが高校生だった時は、そこまで時間に厳しくなんてなかったのに。

私は女の子だから……というのもあるのだろうけれど、お母さんがここまで心配するのは、それだけの理由じゃない気がする。

「さっきは港の方まで行ってたんでしょ？ お友達と一緒にだったの？ まさか一人で遊んでたわけじゃないよね」

私の行動も、こうしてすっかりチェックされている。スマホにGPSが付いているので、お母さんはいつもそれで私の居場所を監視しているのだ。

さすがに、あの場所に一人でいたなんて言ったらまた怒らせてしまうので、ここは誤魔化しておくことにする。

「う、うん。クラスの子と一緒にだったよ」

一応、嘘じゃない。たまたま出会っただけとはいえ、あの場所には遠野くんがいた

のだから。

「遊びたい年頃なのはわかるけど、ほどほどにしないよ。夜は変な人も多いんだから。真央は大人しいし、喋るのも下手なんだから、そういう人に声をかけられたら断れないでしょ」

凶星すぎて、返す言葉もなかった。まさについさつき強引なナンパに遭って、もう少しでどこかへ連れていかれるところだった。

私は大人しくて、喋るのも下手だから……こんなんだから、お母さんもつい必要以上で世話を焼こうとしてしまうのだろう。

私もお兄ちゃんみたいにな、頭の回転が速くて、しっかり受け答えができるような人間だったらよかったのにな——と、いつもの自己嫌悪^{じこけんお}に陥^{おと}っていたところへ、リビングで点けっぱなしになっていたテレビの音が急に耳に入ってきた。

「……ということ、このラビ^{ラビ}もしばらく使えなくなるとのことですね」

ラビというワードに、私は反応した。

見ると、液晶の向こうではベテラン風のキャスターが神妙な面持ちでゲストに語りかけている。画面の右上には大企業の名前とともに『サイバー攻撃か』の文字が

あった。

「あ。そのニュースね、さつきからずっとやってるの。お兄ちゃんの仕事、サイバー攻撃を受けてるんだって」

お母さんの言った通り、話題に上がっているのはお兄ちゃんの手配している会社だった。有名なIT企業で、私が使っているラビもそこが開発したアプリだ。

報道によると、この企業が提供している各種サービスはしばらく停止するらしい。試しにスマホでラビを起動してみると、『メンテナンス中』の文字が表示された。そうか。しばらくラビと話せないんだ。

彼に何も相談できないというのは、ちょっとだけ心細い。

「大変よね。でも、会社にはお兄ちゃんがいるから、きつと大丈夫ね」

お兄ちゃんは有能だから、きつとなんとかしてくれる。お母さんはそう信じて疑わない様子だった。

すでに実家を出て大阪で一人暮らしをしているお兄ちゃんは、私と違ってしっかりしている。だからお兄ちゃんに對してだけは、お母さんも絶対的な信頼を置いていた。こういう態度を目にする度、私はまた惨めな気持ちになる。お兄ちゃんが褒められ

る度に、私はダメだと言われているような気がしてしまう。

なんだか息苦しくて、私はさつきと自分の部屋に行こうと足を踏み出した。

テレビの中のキャスターが「速報です」と急に話題を切り替えたのは、その時だった。

「神戸駅付近で、トラックが歩道に突っ込む事故がありました。二人が軽傷。一人が意識不明の重体です」

神戸駅付近で、事故。

ついさつき、私を通ってきた場所だ。

思わず振り返って、テレビの画面を凝視する。映っていたのは、ひどく見覚えのある景色だった。

「あら、事故？ 結構近くじゃない。怖いわねえ」

のんびりと他人事のように言うお母さんと違って、私は内心穏やかじゃなかった。嫌な予感がした。

この場所は、さつき私を通ってきた道。近くには遠野くんもいたはずだ。

彼は大丈夫だろうか。まさかとは思うけれど、事故に巻き込まれていないだ

ろうか。

不安になって、すかさず手元のスマホに問いかける。

「ねえ、ラビ。このニュースの詳しい情報……」

そこまで言ったところで、ハッとする。

画面には『メンテナンスタ中』の文字。そういえば今はアプリは使えないんだった。

仕方なく、ネットで検索する。神戸駅付近で起こった事故。被害の状況。

事故はつい三十分ほど前、午後七時半ごろに起こったようだった。

そういえば、さつき駅のホームから電車に乗り込んだ時、近くで救急車やパトカーのサイレンが鳴っていた。あれはもしかしたら、その事故の対応だったのかもしれない。

ネットニュースの記事ではまだ詳しい情報は出ていない。二人が軽傷、一人が意識不明の重体。さつきテレビで言っていた内容と同じだった。

軽傷の二人はともかく、重体になっている人物のことが気になる。

私はじれったくなって、今度はSNSのアプリを開いた。

思った通り、現場に居合わせた数人が事故後の様子を写真に撮ってアップしていた。

私は目を皿のようにして、それらの投稿を片っ端から確認していく。

すると、ある一つのアカウントの発言が目にとまった。

【^ひ轢かれたのは男子高校生っぽい 制服姿だった】

その言葉の意味を理解した瞬間、足元が崩れていくような感覚があった。

事故に遭ったのは男子高校生。

あの時間帯にあそこを歩いていた人物となると、ますます遠野くんのことか心配になってくる。

と、今度は別のSNSアプリにメッセージが届いた。

学校のクラスで共有している、連絡用のアプリだ。そこに、クラスメイトの一人がメッセージを投稿している。

【遠野が事故に遭った】

視界に飛び込んだ文字に、思わず呼吸が止まる。

遠野くんが事故に遭った。

本当に？

危惧^{きぐ}していた最悪の事態が、SNS上で共有される。

【え うそ どこで?】

【もしかして今ニュースになってるやつ?】

【神戸駅の近く? 港の辺りか!】

みるみるうちに、他のクラスメイトたちの発言も流れていく。

最初に事故の報告をしたのは、向田悠生くんだった。クラスの中でも特に目立つタイプの男子で、彼の発言があると周りもすぐに反応する。

話の流れを見ると、どうやら向田くんは、事故当時にその現場にいたらしい。目の前で遠野くんが車にはねられるところを目撃したようだった。

どうか人違いであってほしいと思ったけれど、クラスメイトである向田くんの発言となれば、それは難しい願いかもしれない。

意識不明の重体。それってどういう状態なんだろう。遠野くんは助かるのだろうか。ついさっきまで、私の話を真剣に聞いてくれていた遠野くん。

あんなに優しい彼が、どうしてこんな目に遭わなければいけないんだろう。

彼にもしものことがあったら、私は一体どうしたらいいんだろう。

「ねえ、ラビ。私、どうしたらいいのかな……?」

問いかけても、もちろん返答はなかった。

私が青い顔をしているのに気づいて、隣からお母さんが「どうしたの。具合でも悪いの? 熱、測る?」と的外れなことを聞いてくる。

テレビのニュースはすでに次の話題に移って、有名な野球選手のホームランを讃えていた。キャスターの声も和やかになり、陽気なBGMがかかっている。

遠野くんが事故に遭ったことなんて、まるで些細なことなのだと言われているような気がした。

事故発生から時間だけが刻々と過ぎていく中で、私にできることは何もなかった。



時計の針が、深夜零時を指そうとした頃。

ネットのニュースで、男子高校生の死亡が発表された。

「……そんな」

信じられない結果に、私の頭は真っ白になる。

遠野くんが亡くなった。

あんなに強くて優しい彼が。

スマホを持つ手が小刻みに震えて、勝手に涙が溢れてくる。布団にくるまって、彼と今日話したことを思い出して、私は声を殺して泣いた。

SNS上では、クラスメイトたちが彼の死を悼むメッセージを残していく。それらの一つ一つがまるで遠野くんの死を証明しているかのようで、余計に空しかった。

「……聞こえますか、真央」

静寂の中で、不意に声が届いた。

少年のような、あるいは大人の女性のような声。やけに落ち着いていて、それがラビのものであることに私はなかなか気づけなかった。

「ラビ？ ……そっか、やっと復旧したんだ」

先ほどまでずっとメンテナンス中だった彼、あるいは彼女。

その口調は、なぜかいつもと違った。もしかしたらサイバー攻撃の影響で初期化されたのか、もしくは仕様変更があったのかもしれない。

「あと三十秒で日付が変わります。早く寝ないと、明日に響きますよ」

ラビの言う通りだった。

明日は平日で学校があるから、寝坊するわけにはいかない。

こんな悲しい事故があっても、日常は続いていく。きつとあの教室では、まるで何事もなかったかのように授業が始まるのだ。

夏休みは明々後日^{しあさって}から。うちの学校では終業式の前日まで、きつちり六時間授業のスケジュールが組まれている。

「もし寝付きが悪いのでしたら、睡眠導入音楽を再生します。クラシック音楽、ヒーリング系、自然音、オルゴールなどから選べます。特に希望がなければ、ランダム再生しますが……」

今日のラビはやけに細かいな、と思った。それに、なぜかお母さん並みに私の世話を焼こうとしてくる。

もしかしたら、ラビなりに私のことを心配してくれているのかもしれない。

心配、という言葉が適切なのかどうかはわからないけれど、少なくとも今の私が精神的に疲弊^{ひへい}していることは理解してくれているようだった。

「……ありがとう、ラビ」

今日の疲れを明日に持ち越さないために、一刻も早く休息を取れとラビは言う。合理的なそのサポートは、どこか無機質で、知的な優しさだった。

「どういたしまして。それでは、音楽を再生します」

落ち着いた敬語で淡々と話すラビの声は、以前にも増して機械的な感じがする。

どんな状況でも冷静でいられるその様子は、まるでお兄ちゃんみたいだと思った。



結局、そこから何時間も寝付けなかった。

けれどいつのまにか泣き疲れて、気がついたら朝を迎えていた。たぶん二時間ぐらいは眠ったのかな。

スマホで時間を確認すると、午前七時。そろそろ^{したく}支度をしないと学校に間に合わない。なる。

ぼんやりとする頭で、昨日のことを改めて思い出す。

放課後の夕暮れ、港の辺りで遠野くと会って、たくさん話をした。普段の私なら

誰にも打ち明けないような内容まで、彼は嫌な顔一つせずに聞いてくれた。

そしてそのすぐ後に、彼は事故に遭ったのだ。

遠野くんが亡くなった。

夢であってほしかった。

もしかしたら本当に夢だったんじゃないかと思つて、クラスメイトたちと繋がっているSNSアプリを開こうとすると、「真央。そろそろ準備をしないと、学校に遅れますよ」と、スピーカーからラビの声が届いた。

口調が昨日のままだった。以前のような少年っぽさはなくなっていて、まるで落ちていた大人の女性のような声色、それも敬語。

その声を耳にした瞬間、昨日のことはやっぱり夢じゃなかったのだと悟った。

遠野くんはもういない。

事故で亡くなってしまった。

今日は、学校で全校集会でも開かれるのだろうか。

全校生徒の前で、先生の口から彼の死を告げられるのかと思うと、その場の空気を想像しただけで、私は耐えられそうになかった。

重い足を引きずって、始業時刻ギリギリに教室まで辿り着くと、そこはいつもと変わらない賑やかさで満ちていた。

まるで昨日の事故なんてなかったかのように、見慣れた顔のクラスメイトたちはそれぞれ楽しげに談笑している。

みんな、遠野くんのことなんてどうでもいいのだろうか。

確かに彼は普段から一人でいることが多かったし、特定の誰かと仲良くしていたイメージもないけれど。それでも、一人のクラスメイトが亡くなった直後にしては、あまりにも関心がなさすぎるんじゃないのか。そんな憤りにも似た感情を胸の奥でくすぶらせていると、すぐ隣から、声をかけられた。

「あれ。一ノ瀬？」

見ると、入口のそばにある席に腰掛けた男子が、こちらに顔を向けていた。短い黒髪に、意志の強そうな瞳。

ワイシャツの袖から覗く腕には、引き締まった筋肉がついている。

どこか余裕のある居住まいから、一見して強者の風格が窺えるその人物――

「……遠野くん？」

彼が、そこにいた。昨日、車にはねられて亡くなったはずの遠野くんが。

まるで信じられない光景に、私は呆然とする。

もう二度と会えないと思っていたその存在が、今、私の目の前にいる。

「え……遠野くん、どうしてここにいるの？」

わけがわからず、私は声を裏返らせた。

もしかして幽霊？ それともただの幻？

戸惑う私をまっすぐに見上げながら、彼はさらに思いもよらぬことを口にした。

「一ノ瀬こそ、なんでここにいるんだよ。昨日、事故で亡くなったって聞いたけど……」

「え？」

私が死んだ、と彼は言う。

一体どういうこと？

ますますわからなくて、私は目を白黒とさせる。

「え、えっと。私、死んでないよ？ 昨日事故で亡くなったのは遠野くんで……だから、遠野くんはここにはいないはずなのに。どうして？」

「いやいや。何言ってるんだよ。昨日、事故に遭ったのは一ノ瀬の方だろ？」

昨日の事故で命を落としたのは、私。遠野くんはそう主張している。

お互いの認識が噛み合わなくて、私はもちろん、遠野くんも珍しく焦っている。

「お。なんか意外な組み合わせだな、遠野と一ノ瀬って」

「ほんとだ。いつのまに仲良くなったんだ？」

教室の奥の方から、男子たちの茶化^{ちか}するような声が聞こえた。その発言からすると、彼らにも遠野くんの姿は見えているらしい。

ということは、今ここにいる遠野くんはやっぱり幽霊や幻^まの類^{たぐい}ではないということだ。

そして、昨日の事故のことは私たち以外に誰も覚えていないように見える。

何がなんだかわからないまま、校内には予鈴^{よれい}が鳴り響いた。

遠野くんに色々と聞きたいことはあるのだけれど、今は仕方なく、私は自分の席へ

戻ることにする。

騒がしかった教室が少しずつトーンダウンしていき、やがて担任の男性教師が入ってきて、挨拶の号令がかかる。そのギリギリのタイミングで、一人の男子生徒が教室内へと滑り込んできた。

向田悠生くんだった。爽やかなセンター分けの髪に、陽のオーラを常にまとった人。そして昨日、遠野くんが事故に遭ったことをSNSで最初に報告した人物でもある。確か、事故の瞬間を目撃したとも書いてあった。

彼ならもしかしたら、昨日の事故について何か知っているかもしれない。

後で、彼にも話を聞いてみよう。

先生との挨拶を終えた後は、出欠確認だった。

名前が呼ばれるのは出席番号順。苗字が『一ノ瀬』の私は前から二番目。そして私の前にいる出席番号一番は、例の喧嘩中の友達だった。

「天江。天江ハルカ……は、体調不良で休みだったな」

どうやら欠席のようだった。

昨日の昼休みのことがあって、私は彼女と顔を合わせるのが気まずかったから、彼

女が今日は欠席であることにある意味ホッとした。とはいえ問題は何も解決していないので、先延ばしになったただけだけれど。

「先生」

と、そこへ一人の男子生徒が手を挙げた。

先生が返事をするよりも早く、彼はその場に立ち上がって質問する。

「先生。ハルカは……天江は本当に、ただの体調不良なのか？」

どこか切羽詰まった声でそう尋ねたのは、向田くんだった。

なんだか普段の彼らしくない様子に、私は違和感を覚える。

「どうした、向田。天江のことで何か聞いているのか？」

「何かって……」

彼は引きつった表情のまま教室中を見渡すと、これまたとんでもないことを言い出した。

「だってハルカは……昨日、事故に遭って死んだじゃないか！」

ざわり、と教室内がどよめき立つ。

私ももちろんびっくりして、思わず彼の顔を凝視する。

「どういうこと？」

「何それ聞いてないんだけど！」

「おい悠生。一体何言い出すんだよ!？」

周りのクラスメイトたちからは口々に戸惑いの声上がる。

ハルカちゃんが事故に遭った。向田くんはそう言っている。

けれど昨日の彼は、事故に遭ったのは遠野くんだと言っていたのに。

「天江が事故？ そんな連絡はなかったぞ。今朝は体調不良だって親御さんが言っていたが」

先生は訝しげに向田くんを見つめている。

「悠生。お前、何寝ぼけてるんだよ。そういう夢でも見たのか？」

近くにいた男子が半笑いで言うと、向田くんは至極真剣な様子で「夢なんかじゃない!」と反論する。

「オレは昨日、目の前で見たんだ。ハルカがトラックに轢かれて、すごい血が出てて、全然目え覚まさなくて、救急車で運ばれて……お前らだって、昨日のニュース見ただろ!? ハルカが死んで、お悔やみのメッセージいっぱい書いてたじゃないか!」

「はっ？　なんだよそれ」

彼のただならぬ様子に、周りも困惑している。

向田さんとハルカちゃんは中学の頃から仲が良く、今も同じ陸上部で活動している。だからお互いに冗談を言い合ったりするのはいつものことだったけれど、さすがに今回のこれはジョークとしては笑えない。

そして何より私になったのは、彼の口にした事故の状況が、まるで遠野くんの事故とそっくりだったことだ。

トラックに轢かれて、救急車で運ばれて、そのまま亡くなってしまったことがニュースで発表されて、SNS上ではクラスメイトたちからの追悼メッセージが溢れた。

そして今はなぜか、その一部始終をクラスメイトたちは覚えていない。

何か、説明のつかない現象が起きている。

思わず遠野くんの方を見ると、彼もまた私の様子を窺っていたようで、お互いに目が合った。

彼はそのまま、おもむろに椅子から立ち上がったかと思うと、つかつかと向田くん

の方へ歩み寄った。

「向田、ちょっと来い」

「は？」

有無を言わさぬ様子で、遠野くんは向田くんの腕を掴み、強引に廊下の方へと連れて行く。

「え。ちょ、おい。遠野。なんなんだよ急に！」

吠える向田くんには構わず、遠野くんは教室の扉の前まで来ると、「一ノ瀬も来い」と、私にも声をかけてくる。

「え、私……も？」

「当たり前だろ」

彼の迫力に押されて、私も恐る恐る席を立つ。

「こら、お前たち。どこへ行くんだ。今は休み時間じゃないぞ！」

教壇から、先生の怒号が飛んでくる。

「授業が始まるまでには戻るんで」

遠野くんはそう淡淡と言うと、微塵みじんも悪びれることなく、私たちを連れて教室を後

にした。



誰もいない階段の踊り場で、私たち三人は神妙な顔を向け合っていた。開け放された窓の外からはセミの声が聞こえてくる。ジワジワと肌から噴き出る汗は、暑さのせいなのか、それとも心理的要因のせいなのかはわからない。

「なるほど。つまり……どういことだ？」

向田くんが言った。

その感想はごもつともである。今私たちの間で起きている事象を把握しようとしたところで、わけがわからない、という結論に達するのだ。

遠野くんは私たち二人を交互に見て、難しい顔をしたまま口を開いた。

「向田は昨日、天江が事故に遭ったって言ってたよな。けれど俺の記憶では、昨日事故に遭ったのは一ノ瀬だった。そして一ノ瀬は、俺が事故に遭ったと言っている。つまり、全員が別々の記憶を持ってるってことだ」

「待て待て、意味がわからないぞ。じゃあ、昨日のあれはなんだったんだよ。オレは確かにこの目で、ハルカが事故に遭う瞬間を見たんだ」

ハルカちゃんが事故に遭って、命を落とした。

想像しただけでも寒気の話だった。

昨日、遠野くんが亡くなったと聞いた時もショックだったけれど、それがもしハルカちゃんだったとしても、私の心は耐えられる気がしない。

「って、ちょっと待てよ。じゃあハルカは今どうなってるんだ？ 昨日の事故がなかったことになってるって言うなら、ハルカは無事だったことか!？」

「たぶん、そういうことになるんだろうな。先生も体調不良で休んでるだけだって言ってたし」

「ちよ、オレ電話かけてみるわ!」

すぐさまスマホを取り出す向田くん。きっと彼も、昨日の事故のことでも心をも痛めていたのだろう。

さっそく電話をかける彼を横目に、遠野くんは私に耳打ちした。

「電話、一ノ瀬がかけなくて良かったのか？ 天江と仲良いだろ?」

さすがは遠野くん。クラスメイトの交友関係もしっかり把握しているらしい。けれどそんな彼も、私が今ハルカちゃんから避けられている事実は知らないようだった。

「う、うん。大丈夫。向田くんもハルカちゃんと仲良いし」

そう愛想笑いをする私を、遠野くんはじっと見つめてくる。

なんだか、心の奥まで見透かされているような気がして落ち着かない。

「あ、もしもし。ハルカか!？」

向田くんが声を上げた。

どうやら電話が繋がったらしい。

三人で耳を澄ませてみると、スピーカーの向こうからは聞き慣れた高い声が届く。

「……え、悠生？ その声、悠生なの？」

ずびつ、と涙^{はな}をすすする音。

風邪気味なのか、あるいは泣いているような鼻声だったけれど、その声は間違いない、私たちのクラスメイトである天江ハルカちゃんのものであった。

「ハ、ハルカ……なんだよ、無事だったのかよ……」

立ち読みサンプル はここまで

心底ホツとしたように息を吐く向田くん。

しかしそれも束の間、ハルカちゃんの次の言葉で、再びその場に緊張が走った。

「ど、どうなってるの？ だって悠生、あんた昨日死んだはずじゃ……」

「は？」

向田くんが死んだ、と彼女は言う。

おそろくは昨日の事故で、というのとは、もはや私たちの中で共通認識となっていた。

「オレが、死んだ？ ……もしかしてハルカも、あの事故の瞬間を見たのか？」

「見てたし、昨日のあの瞬間、一緒にいたじゃん！ 二人で港の方まで行った帰り、駅に向かって歩いてたら急にトラックが突っ込んできて……!」

港の観光エリアのそばの、神戸駅付近での事故。やはり彼女が目にしたのもあの事故のようだった。

私たち四人は、昨日のあの瞬間に、それぞれが別の人物の死亡事故を目撃している。ありえない話だった。何かの間違いとしか思えない。

けれど、ただの思い違いにしては、あまりにも珍しい偶然が重なりすぎている。

「なあ」